



見たくないものは見ない

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼最近観た映画「ソロモンの偽証・後編」のラスト近くで、「見たくないものはない」ということが悲劇を引き起こしたのだというセリフに出会いました。まさしく現在の日本の抱える病弊を見事に表現した言葉に感銘を受けました。4月3日の講演の中で寺島実郎さんも指摘されていましたが、日本社会全体に「見たくないもの」から目を背ける時代の空気が充満し、それを敏感に受け止めて迎合

するマスメディアがその傾向を助長しています。

▼中国や韓国が声高に叫ぶ「歴史認識」にも大いに問題があることも事実でしょう。しかし、日本人自身が犯した罪について真摯に検証し、その過ちをもたらした原因を究明することが、他ならぬ日本人自身にとって何よりも重要です。昨年11月末に急逝された松本健一さんは著書『日本の失敗』（東洋経済新報社刊）の中で、どのようにして日本が中国侵略のドロ沼に踏み込んでいったのかを緻密に検証しました。近年、松本さんのように全体像を丁寧に分析するのではなく、日本軍の行動を弁護するための「証拠」のみを発掘し、侵略はなかったかのような歴史の見直しが流行し

ています。しかし、そうした自己満足はむしろ日本の尊厳を傷つけ、国際社会における日本の未来を損なう結果しか生まないでしょう。▼日本のメディアが購読者や視聴者が歓迎するであろう内容の記事や番組に偏りがちであることはかねてから指摘されてきたことです。1980年代に某大手新聞の編集委員をされていた方からお聞きしたことです。アメリカに駐在すると当初は現地で起きている重要なニュースを一生懸命取材して本社に送るのだが、まったく採用されない。本社からは、日本人が読みたい内容の記事だけを送ってこいと言われ、すっかり意欲を失って日本人の好みそうな話題を探してお茶を濁すようになるのだと教えてくれました。

▼既存メディアはインターネットに押されて次第に存在感が薄れつつあります。政府や官公庁の情報を記者クラブによって独占することで得てきた地位に安住していられた時代は終わりつつあります。既存メディアが生き残っていくために必要なのは、自ら隠された真実を発掘し、高い見識をもって社会に警鐘を鳴らす能力でしょう。大衆迎合ではなく、「見たくないものを見る」良質の市民に受け入れられるかどうか重要です。

昨今、自信を失った日本人を鼓舞するかのような番組をよく目にします。しかし自己満足から新しい未来は生まれません。おかしいことはおかしいと言う当たり前の勇気が必要なのです。